

平成 30 年 6 月 2 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03272

研究課題名(和文)「たちの悪い問題」への適用可能性の検討を通じた「ガバナンス形成」理論の研究

研究課題名(英文)On the Theory of "Governance Formation" from the Viewpoint of "Wicked Problems"

研究代表者

小野 耕二 (ONO, Koji)

名古屋大学・法学研究科・名誉教授

研究者番号：70126845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：「政治」とは紛争処理のための公的決定作成であり、政治制度とは決定作成のために事前に設立されたメカニズムである、という視点から本研究は出発する。従来型の政治学は、現存する政治メカニズムの作動様式を研究しているが、現代的政治状況下では、政治制度の通常の作動では処理困難な「たちの悪い問題」が登場しつつある。放射性廃棄物処理問題や難民問題、人種差別政策などの紛争を処理するため、争点をめぐる対立状況を構成するさまざまな個人や社会集団の意識状況を分析しつつ、「望ましい状況」への展望を切り開く「解釈学的政治学」が必要となっている。本研究はそのための新しい解釈学的政治学を提示する。

研究成果の概要(英文)："Politics" should be defined as the official decision-making for conflict resolution, and political institutions would have been established for making such decisions before conflicts arise. These are the starting points of this study. Existing main-stream "political science" usually inquires the working mechanisms of political institutions. "Wicked problems" emerge, however, within modern political situation. It is quite difficult for established political institutions to resolve these issues. Examples are problems of high level radioactive wastes, of refugees, and racial issues, and so on. Advanced societies are facing these problems, and contemporary political scientists have to analyse the consciousness of individuals and social groups which constitute the conflicting situations. Thereafter we can see the process for the better future. For this aim, this study propose to introduce "Interpretive Political Science" into the field of established political science.

研究分野：政治学

キーワード：政治 決定作成 ガバナンス 紛争処理 たちの悪い問題 解釈学

1. 研究開始当初の背景

21世紀初頭の現在、各国レベルにおける政治・経済は大きな転換点に立っている。先進諸国政治は、世界的金融危機のさなかで、経済成長の停滞と財政赤字の累積に悩まされつつ、経済に対する新たな制御方法を模索しつつある。新保守主義や、社会民主主義の「第三の道」といった新しい政治路線が各国において試みられてきたが、それらは国民からの安定的支持を獲得するには至っていない。それどころか、政治不信は各国に蔓延するばかりである。この状況下で「若年層を中心とした有権者の政治離れ」も喧伝されつつある。本研究はこのような現代社会の問題状況を見据え、その解決が困難と思われる「たちの悪い問題(wicked problem)」と称される社会問題に対処するために、多面的な政策形成過程を動的に分析するための「ガバナンス形成過程モデル」の構築をめざすものである。安全保障や環境問題、放射性廃棄物の処理問題といった「解決が困難」とみなされるこの種の問題に関しては、従来型の「政策形成過程論」だけでは対応が困難、との批判がなされているが、それに対する政治学からの応答は不十分なままに留まっている。

2. 研究の目的

現在世界は大きな歴史的転換点にある。グローバル化した世界において、環境問題などの国際的問題に加え、一国レベルでも投票率の低下や政治的不安定化といった現象が、各国において見られている。このような状況下で、本研究は「たちの悪い問題(wicked problem)」と称される社会問題に対する、政治学における「ガバナンスの形成過程」をめぐる研究として構想されている。ここで「ガバナンス」とは、「狭義の統治(ガバメント)の枠を超えて、社会的な領域でも作動する紛争処理/秩序形成メカニズムの総体」を指す。本研究は、具体的社会問題に即したガバナンスの実態を分析する「現状分析の作業」だけでなく、社会問題への対応策としてどのようなガバナンスを構築しうるか、という「よりよき未来」の問題を検討する実践的理論モデル構築へ向けた問題志向的で実践的な研究として構想されている。

3. 研究の方法

研究代表者によるこれまでの共同研究で、本研究の目的を達成するための準備作業は終えていたため、個人研究と共同作業とを組み合わせた以下のような三年計画で研究を進めた。

(1)第一年次には、個人研究を基本としつつ、日本学術会議における他分野の研究者と交流することによって、「たちの悪い問題」の一つとしての「政治忌避」とその表現形態としての「各種選挙における投票率低下」の問題に関して、共同研究の作業を進行させると

ともに、問題意識と分析枠組みの拡大を図るためにいくつかのモノグラフ的論文を執筆する。

(2)第二年次には、共通の問題関心を有する欧米の政治学者との研究交流を深めつつガバナンス研究を進めると共に、それを「紛争処理過程の政治学的研究」と結合させることを通じて、「ガバナンスの形成過程」を分析するための理論枠組みを構築する作業を進める。

(3)第三年次には、再度外国出張を実施することによって「難民問題」に関する現地調査を行うと共に、国内外の研究者との討論を進めながら、本研究課題に関する結論の一つとして、「ガバナンス形成の政治学」の必要性を明確化する。

4. 研究成果

初年次には、個人研究を基本としつつ、日本学術会議における他分野の研究者と交流することによって、「たちの悪い問題」の一つとしての「政治忌避」とその表現形態としての「各種選挙における投票率低下」の問題に関して、共同研究の作業を進行させるとともに、問題意識と分析枠組みの拡大を図るためにいくつかのモノグラフ的論文を執筆した。また第二年次には、共通の問題関心を有する欧米の政治学者との研究交流を深めつつガバナンス研究を進めると共に、それを「紛争処理過程の政治学的研究」と結合させることを通じて、「ガバナンスの形成過程」を分析するための理論枠組みを構築した業績「政治への新たな視座」を執筆し公刊した。そして本研究の最終年次には、国内外の研究者との討論を進めながら、本研究課題に関する暫定的結論の一つとして、「解釈学的政治学」の必要性を明確化した。その上で、これまでの研究の成果を踏まえ、「解釈学的政治学の意義」と題する論文を執筆し公刊した。その具体的研究成果は、以下のようになる。

(1)本研究の初年次の研究成果としては、「政治離れ」と「各種選挙における投票率低下」という「たちの悪い問題」に関する考察を挙げることができる。そこでは、通常「政治に関心を持たない国民」、「投票に行かない有権者」に焦点を当てて「主権者教育」を処方箋とする分析に対して、政党や政治家などの「政治を担う側」への批判的検討を主張している。問題は、単に「政治に関与する側」としての国民・有権者のみにあるのではなく、政治への信頼を損ない政治への関心を喚起できない政治家の側にもある、としつつ、その両側面に対する総体的な分析が必要だという検討を行っているのである。では、「政治への信頼」とはどのように形成されるのか、「政治への信頼を損なう」とは、どのような過程によって進められるのか、これらの問題

を検討することが、第2年次の研究課題とされていったのである。

(2)上記の成果を踏まえ、第2年次の研究は、初年次における研究を、本研究代表者がこれまでに行ってきた「紛争処理過程の政治学的分析」の作業と結合する試みから開始された。既に本報告書の冒頭にも記したように、本研究は、「政治」とは紛争処理のための公的決定作成であり、政治制度とは決定作成のために事前に設立されたメカニズムである、という視点から出発している。だとするならば、「政治離れ」とは、国民が「紛争処理メカニズムとしての政治」の機能不全を自覚しそこから距離を取ることを選択することによって生じている、と見なすことが可能となる。そして「政治を担う側」が「政治への信頼を損なう」ことは、「政治が本来処理すべき紛争を十全に処理し得ていない状況」から由来する、と考察することができるのである。そしてこれらの事態の進展の背後には、従来型の政治メカニズムによっては対応が困難な「たちの悪い問題」の噴出が存在している、と考えられるのである。これらの問題状況への合理的処方箋として、本研究では、従来型の政治制度による「紛争処理のための公的決定」に着目するだけではなく、調停や和解、さらには社会運動などと言った社会に広範に存在している多様な「紛争処理メカニズム」の全般的な活性化を主張している。「政治不信」や「政治への信頼の毀損」といった現象は、狭義の政治空間にのみ焦点を当てた従来型政治研究では十分に分析できず、「ガバナンス」論が切り開いた「狭義の統治(ガバメント)の枠を超えて、社会的な領域でも作動する紛争処理/秩序形成メカニズムの総体」という視角からの分析によってのみ可能となるのである。しかもそれは、単に「現に存在するガバナンスのメカニズム」を分析するという視角からではなく、「過去-現在-未来」という時系列的視点を導入した「未来志向的なガバナンス形成メカニズムの分析」を必要とするのである。

(3)第三年次の研究は、このような「未来志向的なガバナンス形成メカニズムの分析」を可能とするような政治理論あるいは政治過程のモデル論の構築を目指したものとなっている。過去の政治現象の歴史的分析や、現在の政治現象の現状分析を踏まえつつも、そこに留まらない「よりよき政治状況」を創出するためのプロセスモデルを構想することが必要となっているのである。そのためには、歴史や現状から乖離した「理想の未来」を説く規範的思考ではなく、現在の政治状況や政治的紛争を構成し担っている政治的諸アクターの意識状況分析が不可欠である。そのために本研究では「アクターの意識状況分析のための解釈学的政治学」の意義を強調した。しかもそれは、単に現在の意識状況を分析す

るための理論枠組み」に留まらず、そこからどのようにして「望ましい未来の状況」を創出することができるのかを構想する「未来志向的な政治理論」として主張されている。このような議論を、単に「理論モデル」としてのみ提示するのではなく、現状分析から状況の改善のために機能する実践的理論モデルとしての有効性を検証するために、本研究では「アパルトヘイト政策下での南アフリカ共和国」における「白人-非白人」間の対立状況を解消した政治的リーダーシップの分析を、事例研究として紹介している。これは、解釈学的政治学がもたらした新たな政治学的知見の一つであり、この理論モデルをさらに展開することを通じて、難民問題や高レベル放射性廃棄物処理問題といった「現代におけるたちの悪い問題」へのアプローチが可能となっていくと思われるのである。

5. 主な発表論文等 (研究代表者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

小野耕二「シリーズ 変容期の政治学 解釈学的政治学の意義」、査読無し、名古屋大学『法政論集』第276号、2018年3月、63-95

小野耕二「政治への新たな視座 政治の重層性の把握をめざして」、査読無し、名古屋大学『法政論集』第268号、2016年12月、39-74

小野耕二「政治的能動性の獲得をめざして 18歳投票制の実現に際して-」、査読有り、『生活経済政策』第227号、2015年12月、10-13

小野耕二「政治を見る眼 18歳投票制の実現に際して-」、査読有り、『数研AGORA』第64号、2015年11月、1-3

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 耕二 (ONO, Koji)
名古屋大学・大学院法学研究科・名誉教授
研究者番号：70126845